
白りんご

南川 紗結

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白いりんご

【Zコード】

Z6426P

【作者名】

南川 紗結

【あらすじ】

私たちは白いりんごみたいに珍しくて、変。
でも…人を好きになることは変わらないから…。

女の子同士。恋に落ちてわかったよ。

白（前書き）

これは、私自身の実体験も入っています。ほんとこつらい事も、全て「あず」に話してきました。

本当に大切なものの、失う事ができないものです。

小説の形にして皆様に届けば良いな、と思っています。

白

小さこ頃からやつぱり少しづれていたのかもしれない。

電線の下を歩くな、と親に言っていたからいつも上田になつて歩いていた。

電線をみて。自分が電線の下を歩かないよつて見ないで。上にある電線だけを見ていた。

そして今になつてその支障が現れた。

電線の真下を歩いていれば、こんなことにならなかつたのか…。

今日も明日もその先も

ずっと私は…

一緒になれないキミを…。

「何ぼーっとしてんだよ」

拓也の声が耳の奥で重く響く。

「えつ！？べつに…何だっけ？」

私の返事に拓也はめんどくさいついにだからあとだるやつて答えた。

拓也は私の彼氏だ。これと云つて日常にも不満はないし、たぶん幸せなんだと思

う。でも…突然不満になる。

いや、もっと簡単にいうといらなくなる。

邪魔になるのだ。拓也が私の恋愛を愛で邪魔するのだ。

名門校とはほど遠い女子校に受かり、中2で落ちこぼれになつた。

そんな人生にも

恋愛という道は確かにあった。

男子校の文化祭でナンパをされてからどのくらい時間がたつだろう。たしか私は小5だった。兄貴の学校に友達と一緒に行つたのだ。中学校見学ということで。

ことで。

ズレていたからか、私は人よりギャルく、化粧もそれなりにしていた。ませていたのだ。

背も同年代の子よりも少し高かった。だから中学生ぐらいに見えたのだろう。そのとき拓也と出合つた。今思えばかなり年も離れているし、そこでイケメンでもない普通な拓也とメアドを交換したのかわからない。けど、そのとき確かに私は拓也が好きだった。

昔話のように遠い昔に感じられる拓也との出合いを思い出していいると、携帯電話

のバイブがポケットに響いた。ポケットから出すと液晶には”あづ”の文字。拓也

の話を無視して急いで電話に出た。

『もしもししつ……偉奈？ 今暇なの。付き合つてよ。今から会える？』聞き慣れた、大好きな声だった。拓也を見るとムスッとした表情で私を見ている

。無理もない。拓也との話の方が先だったから。

「うん！いいよ。」

睨む拓也を横目に私はあずに返答をした。

貴重な一本の電話なのだ。私にとつては。

それを理解してほしい。拓也に。

一人しか愛してはいけないわけではないことを拓也はちゃんと知つ

ているはずだ。

アイコンタクトで拓也と会話をした。いくね、と。

私は置いてあつたバックを軽々しくもちあげた。拓也は怒ったようにこちらを見

ている。でも、私はそれを振り切りようく店をでた。

『今何かしてた?』

あずのこと考えてた。

「べつに何もwww」

『ほんと? 時間とか大丈夫?』

あずのためなら。

「大丈夫」

今すぐあずに会いたい。

渋谷のセンター街のマックがいつも待ち合わせ場所だった。今から向かうと最低でも30分はかかる。遠いのは了承済み。しかし、行くのだ。

あずなために。私のために。

「着いたよ」

とメールを打つ。

あずの返信はけして速くはない。むしろ、焦られるほど遅い。だからか、私は

あずからの返信に胸を踊らせる。

私の気持ちを知つてか知らずかあずはいつも私の胸の奥をぐすぐる
ように接つし
てくる。

そんなあずが愛おしくてたまらない。

少しして携帯のバイブが私にメールの返信を告げる。返信内容は大
体の検討はつ
く。だけど、あずからの返信というだけで胸が高鳴る。

ゆっくりと受信ボックスのあずからのメールを開く。すると文は
「うしる」
としか書かれていなかつた。

トントン

誰かに肩を叩かれた。振り向くと指がぼっへにあたつた。そしてあ
ずが微笑んで
いた。

「遅い。待つたんだから。」

あずの指をそつと自分の手で包み込む。
触れた手が熱くなるのを私は感じる。

あずは気が付くだろうか。私の熱くなる手と高まる鼓動を。

チャリ、とあずはケータイをテーブルに置く。キー ホルダーは青い
水色のハート

だ。私があげた、色違いのモノだ。
口実を作つてもらつてやつとの思いで渡すことができた。

キー ホルダーを付けてくれているだけでうれしくなる。暖かいフワ

フワした気持

ちで青いハートを見ているとあずが少し笑った。

「どうしたの？」

あずはフワッと笑う。

あずの笑い方も何もかもが私をフワフワと浮き足立たせる。
「なんでもないよーあずから呼ぶなんてめずらしね。なんかあつた
？」

この気持ちを悟らせないようにいつものように笑って返した。

「いや、特には話とかないけど、急に会いたくなつたんだよね。偉
奈に。」

私と顔を合わせず、あずは窓からの景色を眺めていた。

”こっち向いて”

と心中でひたすら言つてみる。届かないことぐらいわかっている
けれど。

「あずはかわいいなあ。」

クスクスと私は笑つてあずの腕を自分の腕に絡ませる。
幸せだった。

「偉奈のほうがかわいいよ」

あずはさつきみたいに笑つてポンポンと頭を撫でた。温かい気持ち
になつた反面

鼓動が早くなる。

急にその笑顔が真顔になつた。

私の後ろを見ている。

釣られて振り向くとそこには拓也がいた。

「あのなあ…。」

呆れたように拓也は頭をカリカリかく。

「なに?用があるなら速く言つて。」

「」の際だから言つけどさ、俺つてお前の何?..

あずとの時間を邪魔してまで聞くことだらうか。私は頬づえをした。

「お前の何って聞かれても答えようがないんだけど。」

拓也がイライラした顔でこっちを見ている。

「あたし帰えるね？」

あずが戸惑ったように席を立つ。

行かないで、私が言つよりも早く拓也が口を開いた。

「いやいいよ。あずちゃんがいないとこいつ余計に怒るから」「あずは拓也と私を顔をちらつてみて居心地悪そうに座り直した。

なんでだろう？さつきまでの幸せはどうにいったんだろう？

拓也の何気ない一言や仕草が私をムカムカさせる。

今すぐ消えて欲しい、と私は机をガンッと蹴った。

「速く行つて。」

「は？だからなんでお前はいつもそつなの？人の話聞かないでそつ

やつて……」

「つるさいっ！！！」

店内がザワついた。こんな修羅場をひとに見られるのは初めてだ。

「あ、あのさ、今日は拓也君ひきとつてくれる？ 倖奈調子悪いみたい
いだし。ね？」

「

あずが困つてゐる。けれど、私の中のムカムカが収まる」ではない。
「いや、もあいいよ。幸奈いままでありがどじやな」

拓也が真顔で言つて店から出ようとすると。

「幸奈このままじゃダメだよ！早く追つかけなよ」

あずは必死に言つが私には追いかける気はさらさらない。逆にせい
せいしている

ぐらいだ。

「いいよべつに」「元に

私の返事を聞いてあずの顔がみるみる悲しげになつてゆく。

「こんなのおかしいよ」

それだけ言つとあずは泣きながら拓也の後を追いかけるよつとして

店をでた。

どうして?ただ私はあずといたいだけなのに……。

少しして、あずが顔色を変えて戻ってきた。
「偉奈。明日けやんと謝りな。あたしより、拓也君を大切にするべきじゃないの？」

「…あずには分からぬよ。私の気持ちなんて。」

ホントにあずな事が…

言おうとでかかった言葉は詰まつて言えない。
この気持ちがバレてしまつかもしれない。あず自身は私とは違う感情を持つているはずだ。

”友達として”私に接している。元々グループも違つし同じ部活に入つてるわけでもない。

ふいに思った。

この気持ちはいつから始まったのだろう……と。

涙がこぼれた。ぽろぽろ流れ出て止まらない。

「偉奈あのね……」

「もういいよ。もういい……」

それだけあずに言つと私は店を出た。あづじめんね。何度も心の中

でつぶやいた

。だけどあずに届くはずもない。

中3のはじまりだった。

あずにこの想いを抱くようになったのは…。

莉緒と朝待ち合わせをしていた私はその待ち合わせに遅刻をしてしまったのだ。

「ごめん、と待ち合わせ場所の莉緒に言つたやうにあずがいた。関わりは全くなかつた。むしろ同じ学年でこんなひどい居たことさえ知らなかつた。「この子、あずつて言つた。去年同じクラスでね。偉が遅いから捕まえちやつた！…！」

莉緒はあずの腕に自分の手を添えた。

「ああ、私、偉奈。」

不機嫌にあずにあいさつをするがあずは満面の笑みで私を見た。
普通初対面でこんな態度をとられたら不快感を覚えると思う。その

こりからあず

は私の予想を”裏切る”子だつた。

「あたし、あず。よろしくね！…！」

笑うあずを無視して、莉緒の腕引つ張つた。

「偉！待つてよ。あずが…」

私はあずの顔を睨む。私が遅れたのはいけないと思つが、仲良くもないのに馴れ

馴れしくする人は苦手なのだ。

いや、あずは鈍感なのだ。私が怒つてることに気づいてられない。

「つむぎも一緒に行くから大丈夫だよ！」

「ここにこしながら私たちの方に来るあずを私は睨み続けた。さすがに莉緒は気づ

いたようすでこちらの様子をうかがつている。

そしてあずをほっておくよつて、私の腕を組かえした。

「行こうかっ！…偉つ！…」

私の機嫌をとるように、莉緒は私に沢山話し掛けてくる。その様子をあずは優しい顔で見守っていた。

まるで小さい子供をしつ見守る母親のよう。

「早速席替えでもするか！」

と担任の川口は言った。みんな不思議な顔をして川口を見つめている。

無理もない。今日は始業式なのだ。当分は出席番号順といふところが、川口はあえてそれを覆した。

「何番かなあ。」

莉緒がさつきの調子で話しつけてくる。

「うち、17番が今月のラッキーナンバーなの。17だったら交換してよね。」

川口は体育教師で型がいい。だからくじ引きのくじもやたら不格好だ。

「一斉に開けよお……せんのつ……」

「偉、何番つ！？」

「嘘でしょ？」

「なに？ 固まつて。どうした？」

「だって…引いた番号は

「17番」

まさかそんな簡単に自分の手元に17番がまわってくるとは思ってもみなかつた私は莉緒に紙だけ見せて笑つて見せた。

「偉ついてんじやん！」

ついているのだ。

「いや、今日はやばいぞ。ちなみに莉緒何番？」

ピラと見せた紙には”13”の文字。

一見番号が近いので近く感じるが、実際まったく近くではないことを知つている

私はガクンと肩を下げる。

「離れたねえ」

莉緒に大袈裟に悲しい顔を作つて見せた。莉緒は、はいはいと言つて軽く頭を撫

でて私をあしらつただけだ。私は莉緒のそんなところが好きだった。

「うちの近くは海月みづきとかだけど、偉は？」

「つかは…」

自分の席を見ると隣にはあずが座つていた。

「霧島さんだ。」

わざと名字で呼んだ。あまり親しい関係をのぞんでいなかつたからだ。

「ああ、霧島かあ。頑張つ……！」

ぐつとガツツポーズを大袈裟にとつた莉緒に私は不思議な顔をした。

「あれ？ 莉緒つて”霧島”つてよんでんの？」

さつきまで”あず”と呼んでいたのだが、急に”霧島”に変わったからだ。

「ああ、うん。霧島のこと名前で呼ぶ人いないよ。さつきは自己紹介つぽかつた

からあずつて偉に言つたけどね。」

莉緒はあはつと歯を見せて笑つた。

仲良くする気もない私はふうん、と鼻をならして見せた。

「ほら自分の席に座れ~」

川口の声でバラバラとみんなが動き始めた。莉緒に別れを告げて自分の席についた。

隣に座っていたあずは一人でも凛としていて何かみんなとは違っていた。

「あ！霧島あ！席近い近いつ！うち後ろ」

「うわっ！まじでっ！？いっぱい話そつ！」

あずは私の反対側を向いて名前も知らない子と話を盛り上げていた。このまま気付かれずにいくことが私の幸福だった。

「偉っ」

名前を呼ばれ、私は後ろを向いた。そこにはおなじグループの美佐が座っていた。

「席後ろ！」

にかにか笑いながら私に話かけてきた。私は笑顔になつて美佐に答えた。

「よかつたあ。周りシケメンだったから困つてたあ。マジ救いつ！」

美佐ナイスっ！

美佐の手を握ると、離せ、と言つような熱い視線を感じた。

「偉い。その手やめて。」

そこにいたのは美佐の彼氏、と言えるような存在の千榎だ。

「ごめん、ごめん。」

私はパツと手を離すと千榎は美佐の頭をポンポンと自分の手で撫でた。

二人は仲良く笑い合うと私がその場に居ないかのように話始めた。なんだかんだでもやっぱ彼氏か…。

私が席に座り直しと横を見るがあずと目が合つて、頬ずえをとい

ていた手を不

意に頬から外してしまつた。

「あつ…」

そのとき莉緒の言葉を思い出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6426p/>

白りんご

2011年1月12日20時41分発行